

# 本学介護福祉学科卒業生の意識調査

澁谷正子<sup>1)</sup> 高橋美岐子<sup>2)</sup> 佐藤沙織<sup>3)</sup>

## An Attitude Survey of Graduates of the Care and Welfare Department

Masako SHIBUYA Mikiko TAKAHASHI Saori SATO

要約：本学介護福祉学科卒業生に対して、卒業後の勤務状況、専門職としての認識、仕事への満足感、将来への展望などについてアンケート調査を実施した。その結果介護福祉士職についた大部分の者が、介護の仕事に専門的な知識や技術は必要であり、誇りを持って取り組める仕事であると考えていた。また、高齢者のよりよい生活のために役立っており、介護福祉士の資格は、職場でも重視されていると答えた者が約7割みられた。「仕事は楽しい」と答えた者が多かった一方で、「他の職種に比べて社会的評価が低い」「いき詰まりを感じている」などの回答もあった。収入に関しては、現在の給与額に満足している者と満足していない者の数に殆ど差はみられない。勤務条件別で見ても、正職員の中、満足・不満足の違いはほぼ同数である。

本調査により、調査対象者の多くが、職場の人間関係に深刻な悩みをもっていることがわかった。

キーワード：介護福祉専門職、人間関係、給与

**Summary :** An attitude survey of graduates of the Care and Welfare Department of this college was conducted.

Questions included ; the work situation after gradation, professional recognition, attitudes to their occupation, a self rating of skill levels and future expectation of the graduates. Most participants noted a need for professional knowledge and techniques in order to perform their roles and engage in patient care.

The participants believe that they can have pride in their work and career. 70% of participants stated that care and welfare work is essential to enable older people to enjoy their lives. A qualification in care and welfare is essential and is held in high regard by those with whom the graduates work. The survey identified that income was not a predictor of work satisfaction. This study has therefore shown that the majority of participants have strong concerns about human relationships in the workplace.

**Keyword :** care and welfare specialist. human relation. a wage income

### I. はじめに

近年、全国的に福祉系の教育機関が増加し、介護福祉士を目指す多くの人が社会に送り出されている。本学の2年課程の介護福祉学科では、平成8年に開学して以来、152名の卒業生が介護福祉士として巣立っている。

少子高齢社会の現代、福祉サービスに対するニーズは複雑多様化しながらなお増大し続けている。このことは、福祉専門職に携わる者へ大きく影響を及ぼすものであり、その資質も問われることとなる。福祉専門職が、どのような意識をもって従

事しているかを知ることは、専門職としての資質向上のための第一歩として重要なことである。

そこで、福祉の現場に就職した本学の卒業生の動向と現況を調査し、今後の就職指導や卒業後の相談、向上心の育成・支持・援助に役立てたいと思い本調査に取り組んだ。

### II. 研究目的

福祉職に就いた本学卒業生の現況を調査し、今後の就職指導、卒業後の相談、向上心の育成・支持・援助の一助とする。

1) 介護福祉学科助教授 2) 講師 3) 助手

本研究は第7回日本介護福祉教育学会大会において発表したものを再編したものである。

### Ⅲ. 研究方法

1. 方法：質問紙調査法（郵送法）
2. 期間：2000年6月1日～6月30日
3. 対象：本学介護福祉学科卒業生152名  
(1～3期生)
4. 内容：
  - 1) 調査対象の属性（卒業年、勤務先種別、勤務条件、給与額など）
  - 2) 仕事に対する意識
    - (1) 専門職としての認識（専門的知識・技術、社会的評価、資格など）
    - (2) 仕事の満足度
    - (3) 専門職としての向上心、将来展望

### Ⅳ. 結果考察

1. 回収数（回収率）：59（38.8%）
2. 調査対象の属性（図1，2・表1，2）  
有効回答数59名中39名（66%）が老人保健施設・特別養護老人ホームに勤務しており、病院勤務10名、公社・社協5名、身体障害者療護施設2名、知的障害者・児施設、学校2名となっている。  
勤務条件は、42名（71.2%）が正職員として採用されており、臨時・パートがあわせて14名（23.7%）となっている。給与額（月総支給額）は16万円以上が20名（33.9%）、14万円以上16万円未満が19名（32.2%）であった。

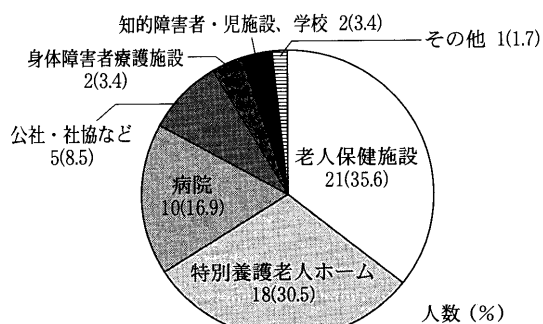


図1 勤務先種別

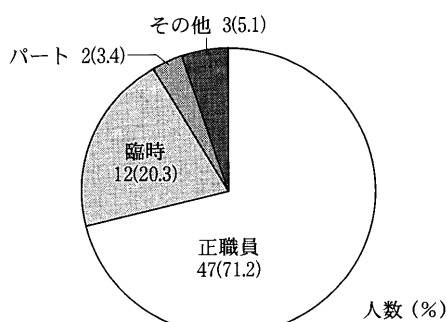


図2 勤務条件

表1 給与額（勤務先種別）

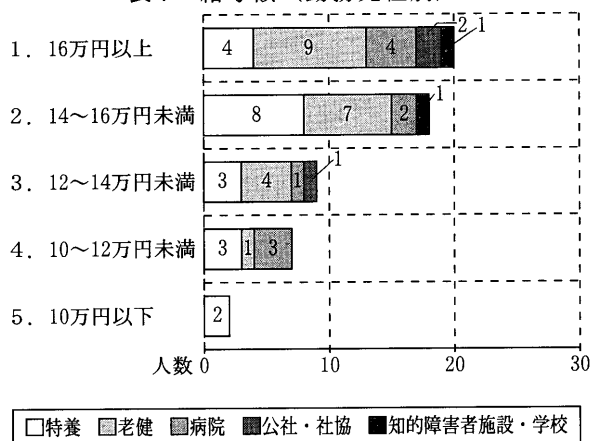
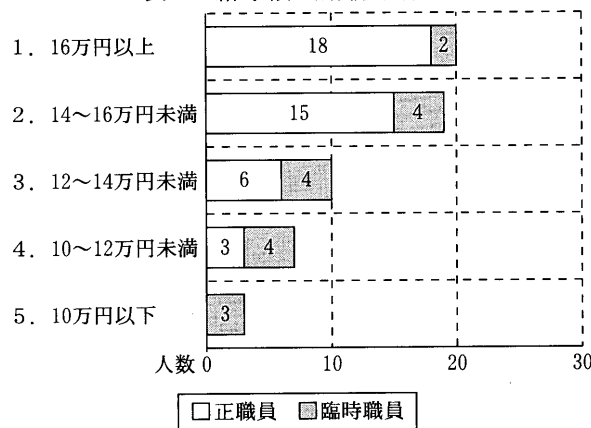


表2 給与額（勤務条件）



#### 仕事に対する意識（表3，4）

##### (1) 専門職としての認識

「介護の仕事に専門的な知識や技術は必要である」と答えた者が94.9%おり、「介護の仕事は誇りを持って取り組める仕事である」とした者が79.7%あった。また、「介護の仕事は、高齢者のよりよい生活のために役立っている」が76.3%、「介護福祉士の資格は、職場では重視されている」が67.8%、「介護福祉士の資格は職場で必要である」が66.1%であった。

「これから他の医療・福祉・教育系の資格を取得しようと考えている」者が66.1%みられた。その内訳は、社会福祉士17名、ケアマネージャー13名、レクレーション・インストラクター6名などであった。これは卒業生が介護専門職として、現場における様々な場面を通して実感し、その重要性や専門性の必要性を見いだしていることを意味するものと考えられる。

表3 給与と満足感

		給与に満足している	給与に満足していない
1. 仕事は楽しいですか。	楽しい 楽しくない	14	18
2. 行き詰まりを感じますか。	感じない 感じる	10	9
3. 無力感を感じますか。	感じない 感じる	10	10
4. 働き続けたいですか。	続けたい 続けたくない	9	5
5. 仕事に行きたくないと思いますか。	思わない 思う	15	13

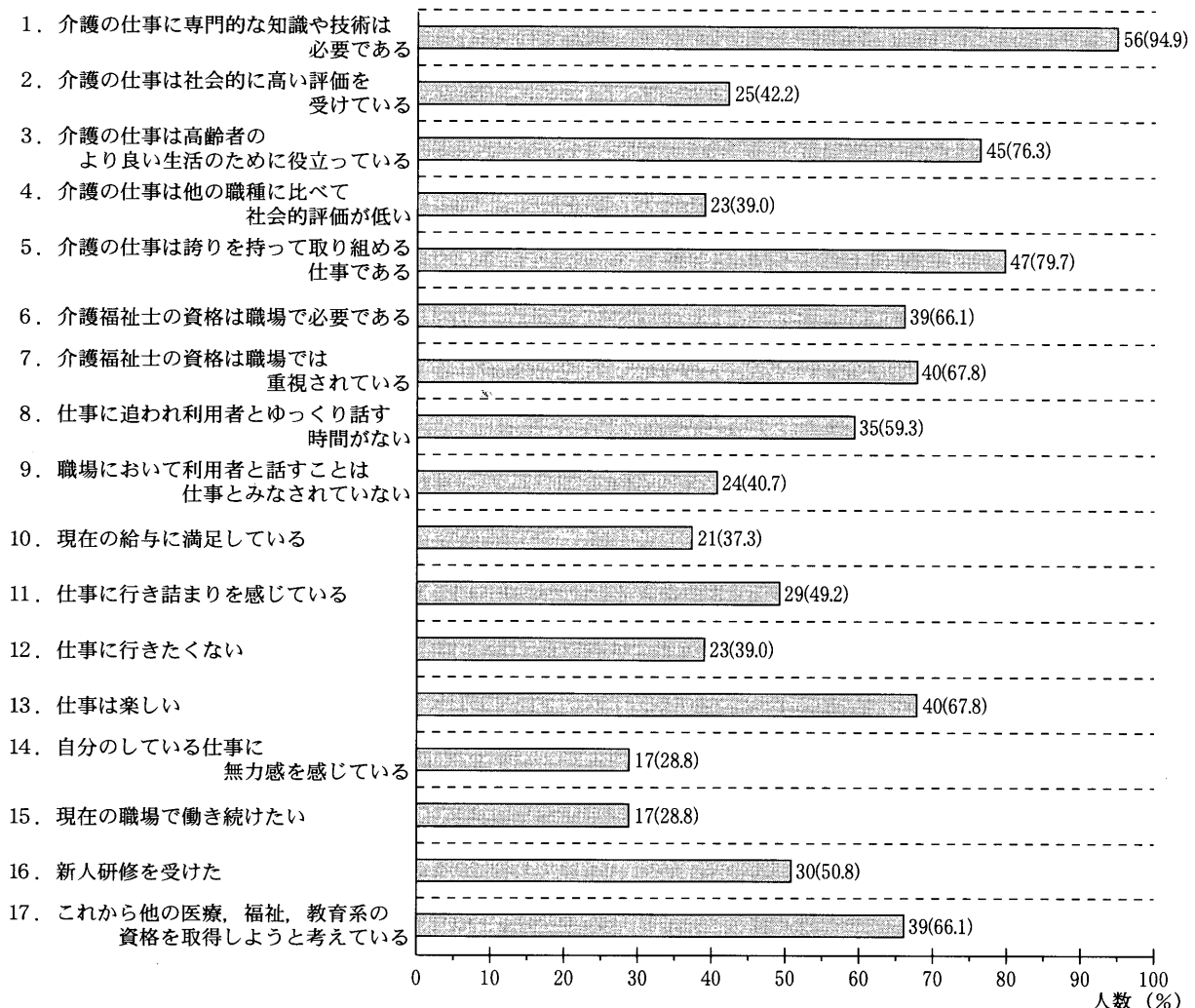
(2) 仕事の満足度

「仕事は楽しい」と答えた者が67.8%あったが、「介護の仕事は他の職種に比べて、社会的評価が低い」39.0%、「現在の職場で働き続けたい」28.8%、「仕事に追われ、利用者とのゆっくり話す時間がない」59.3%、「仕事に行き詰まりを感じている」49.2%、「職場において、利用者と話すことは仕事と見な

されていない」40.7%などがみられた。また、「自分のしている仕事に無力感を感じている」者が、28.8%、「仕事に行きたくない」経験を持つ者が39.0%あった。これらの理由をみてみると、上司同僚との人間関係に起因するものがもっとも多く、次が肉体的・精神的疲労、業務内容や体制、そして職業に対する認識の違いのあることがわかった。

上司や同僚との人間関係については、「どんなときに仕事に行きたくないと思ったか」については「嫌いな職員がいるとき」「上司ともめたとき」「自分に加わっていかなくとも職場の人間関係で問題があったとき」「職員間での意見の対立」「上司に対する不満」などの記述があった。行き詰まりを感じる理由では、「上司や先輩の考えを押しつけられる」や、「利用者・同僚・上司らとの人間関係の維持が大変」などが列挙されていた。また、

表4 仕事に対する意識



「現在の職場で働き続けたいと思わない理由」では、「上司の考え方や意見に食い違いがある」「職員間の人間関係が複雑」「嫌がらせ」など質問項目の様々なところで人間関係に関する意見の記述がみられた。一方、「今後も同じ職場で働き続けたいと思っている」者は、「先輩とも気軽に話ができるし相談もできる」「職員同士のふれあいが多くて楽しい」「職員間も仲がよいので働きやすい」「職員間の連携・信頼関係がとてもよい」などの記述があった。

福祉職にとって職場の人間関係が円滑であることは、利用者に適切なケアを提供する上で、重要であるばかりでなく、職業人としての働く意欲ややりがいにもつながっていくものと考えられる。本調査対象者は、専門職としての経験が浅く、家族・友人以外における人間関係においては、ようやくスタート地点に立ったばかりである。職場環境を構成する人々の人間関係づくりは、大きな課題であると考えられる。

一方、肉体的・精神的疲労の記述では「疲れがたまり体力的にきつくなると、仕事に行きたくないと思う」「日勤が続いて体がつらい」「精神的に疲れが出ているとき仕事に行きたくない」「朝起きるのがつらい」「体力が続くかどうか不安」などの意見があった。

収入に関しては、現在の給与額に満足している者は21名(35.6%)、満足していない者は24名(40.7%)であった。勤務条件別で見ると、正職員42名中、満足している者は17名(40.5%)、満足していない者15名(35.7%)で差はほとんどなかった。また、正職員以外では、17名中満足している者4名(23.5%)満足していない者9名(52.9%)で満足していない群が多かった。その理由として、正職員で満足している群では「自分の仕事内容に自信や責任が十分でなく、むしろありがたい」「今はもらっている給料に恥じないくらいの仕事をするだけで精一杯」などがあげられていた。満足していない群では、「大変な仕事である割に他職種より低い」「資格があっても無資格者と同じ扱いである」「夜勤手当が低い」などがあった。

臨時職員の、満足している群では「仕事も良くできないのに、資格手当まで付いている」

「今の生活に何ら支障がないから」「他の人よりも多くもらっている」などがあった。満足していない群では「常に働いているという感じ」「夜勤手当が低い」「重労働の割に低い」「給与の基準がよくわからない」「資格手当・夜勤手当がない」などがあった。

以上のように、給与の満足度では、臨時(パート)職員に不満足な群が多かった。しかし、全体で見ると、給与に満足しているか否かの理由は、正職員か否かによる違いよりも、施設の種別や施設個々の福利厚生面の違い、個人の価値観、職場環境の介護職に対する社会的評価などが影響しているものと考えられる。

## V. 結論

- (1) 介護福祉士として専門的知識・技術を持って従事することに誇りを持っている。
- (2) 職場の人間関係に苦慮している。
- (3) 給与の満足度は個々の価値観の相違もあるが、額の多少よりも仕事に対する満足度が優先している。
- (4) 将来、現在の仕事に関連して、新たな資格取得を志す者が多い。

## おわりに

本研究の調査にご協力くださいました本学介護福祉学科卒業生の第1、2、3期生の皆様に心よりお礼を申し上げます。

## 参考文献

- 1) 石原多佳子：介護福祉士養成校卒業生の仕事に関する認識：日本看護福祉学会誌、第5巻第1号 p 58,59；1998
- 2) 中部女子短期大学介護福祉教育研究会：介護福祉教育に関するアンケート；1996
- 3) 秋田県福祉保健人材センター：福祉系学生の就職等に関する意識調査報告書、秋田県社会福祉協議会、1998,2
- 4) 杉本敏夫・笠原幸子：介護福祉士教育における今後のあり方～介護福祉士及び社会福祉士コースの学生の意識調査を通じて～；日本介護福祉士教育学会第5回大会；1999